CHASE HOME
Museum of Utah Folk Arts

チェイス・ホーム
ユタ州民族芸術博物館
が誇る

日常の芸術

ユタ州シンボル、蜜蜂の巣は、州住民の勤勉さを適切に表現しています。芸術家らは、ミツバチのように、滅多に休むことなく余暇の時間でさえ、日ごろ身の回りの物を装飾するための美を創作しています。原住民、保護地域民、エスニック、職業人であるとないとに関わらず、これらの人々の創作した芸術品は文化的本質を守り、私たち全ての人々を豊かにしてくれます。

この展覧会は、1976年以来、現存の芸術家達によって、ユタ州芸術コレクションのために製作された民族芸術品を特徴としています。

１階ギャラリー

アメリカ原住民の民族芸術

ユタ州の山々、渓谷、そして砂漠は歴史が書き綴られるずっと以前からインディアン原住民の故郷でした。全ての土着民がそうであるように、私たちが今ユタと呼んでいる地に住んだ人々は、地域の自然の源を有効に使う方法を伝達することで遺産を残してきました。もちろん、現代のインディアンはしばで家を作る必要はありませんし、動物の皮で服を縫ったり、入れ物をその土地で取れる野菜で編んだりする必要はありません。それでも尚、多くのアメリカ原住民は、自分たちの文化の特性を表現する、地域のお祝い事に使われたり、芸術収集家に売られる手作り物を創ることで、こういった伝統的技術を受け継いでいます。

現代のユタのインディアン民族芸術家達によって製作された、最も一般的な芸術スタイルは、地域で収集された材料から創作された物に見られます。古代から受け継がれた柳の枝を編んで作られた実用籠から、現代のご祝儀に使われる色鮮やかなお盆、また、観光用に販売される籠を作る職人もいます。乳児を運ぶために使われる揺りかごを、木、柳、皮、ビーズをなどから作り上げる職人もいます。多くの芸術家がパウ・ワウの儀式に使ったり、ガラスのビーズ、ヤマアラシの針、貝殻やスパンコールで飾られたなめし皮を使って、何かしらのイベントで身に付ける服装品、宝石、アクセサリーなどを作ります。また、ユタ出身の芸術家らは、木や皮を地域生活と祝い事に必要不可欠なドラム、フルート、ラスプなどに作り変えます。

ユタのアメリカン・インディアンの人口は、土着種族住民とつながりのある人々、つまり、言語学的に関係のある、ゴーシュート族、北ユート族、パイウート族、ショショーニ族、ユート山ユート族、アタバスカ語のナハボ族、そしてユタを自分達の故郷として選んだ様々なその他の種族を含んでいます。

地方の民族芸術

ユタの人口の大部分がワサッチ山脈に沿った都市街に集中していますが、ここに住むほとんどのユタ住民にはユタの地方地域にルーツがあります。住民の基本観念は、豊富な物資と創造力を尊ぶ地方の文化的伝統に基づいています。

西部開拓者たちは、生き延びるために知識と技術を身に付け、自給自足することを要求されました。手持ちの材料では、売り物や娯楽などは稀にしか得られませんでしたので、人々は自分で自分の必要を満たすしかありませんでした。今日この自給自足の伝統は、100年前に州が出来た時と同じくらい強く、まだ一部のユタの住民に息づいています。床を覆うじゅうたん、馬を統御する手綱、馬ろく、また家を飾る芸術品は手軽に買えます。しかし、我々の多くは自給自足を好み、物を大切に取って置いたり、使い回わしをし、自然の源とエネルギーを自家製物資のために使います。そのような行為は、物資を大切にしようという望みを高めてくれますが、望みや必要品をも美と意義を持ったものにしようという気持ちにさせてくれます。

地方のユタ住民と、その文化的遺産を受け継いだ人々は、古着を編んで敷物を作ったり、昔の生活を再現したミニチュアを彫ったり、複雑で美しいさまざまなオブジェを創作しています。そうすることによって、地方の文化的遺産の価値を祝い後世まで受け継いでいるのです。

2階ギャラリー

民族文化芸術

ほとんどのアメリカ人がそうであるように、ユタの住民には、世界中いたるところの人種、民族をルーツに持っています。我々がユタ山脈、渓谷、砂漠に住み着いたのにはいくつもの理由があります。自然の恵みを受けて生活するため、宗教上の迫害から免れるため、宗教社会に加わるため、教育を受けるため、また、家族や友達と一緒に住むためなどです。そして、一緒に持ってきた慣習、伝統、芸術性によりユタの常に変化ある社会構成を築きあげたのです。

150年前、ユタへの移民はアメリカ、イギリス諸島、そしてスカンジナビアからやって来たモルモン開拓者が、後にユタの領地となったアメリカ原住民のグループに加わることで始まりました。南ヨーロッパやアジアからの移民は、ユタが州の地位を得るまでの成長に貢献しました。そして、20世紀を通して、移民の波はヒスパニック、ポリネシアン、東南アジア、そして最も最近では東ヨーロッパからの人々がユタを故郷とするためにやって来ました。

多くの伝統は、時としてひとつの社会から他の社会に移る際に、変わってしまったり、失われてしまったりします。宗教的信仰を中心とした民族工芸、地域の祝い事、または民族の本質は、ありふれたところに存在しています。こういった芸術的表現は、元々の原材料が得られなくても生き延びます。というのも、それが民族の帰属意識と文化遺産を象徴し、賞賛するものだからです。工芸作品の中で最も力強い表現は、伝統的な芸術を通して語られている移民の物語です。

職業的民族芸術

私たちの人生の大半が仕事で占められているので、多くのユタ住民が自己表現のもう一つの方法として、仕事を通して自己認識するのも不思議ではありません。他の「民族グループ」と同じように、職業グループらは、グループの価値観、懸念、人生のあり方などを具現化するような伝統的芸術を創作しています。

何年もの間、人々は必要なものは何でも、あるものを使って、伝統的知識と自分の２つの手を使って作ってきました。今日においては、必要なものは全て工場で生産される品物で間に合いますが、いまだに受け継がれた伝統的な手作業を必要とする、有益で美しい物を製作する職業があります。現在ユタにおいて工芸されている民族芸術品には、石彫り、蹄鉄工、そして牧場用具があります。ユタ民族芸術家の多くが実用向けに工芸品を製作する一方で、中には手作り工芸を過去の思い出深い用具や場面をミニチュアにし、装飾品として製作する職人もいます。

チェイスホームの歴史

1847年、最初の開拓者がソルトレーク・バレーに辿り着いたすぐ後に、アイゼック・チェイスはエミグレーション・クリークに製材所と掘建て小屋を建てました。その近くに土地を所有していた、モルモンの指導者ブリガム・ヤングがその数年後にチェイスの仲間入りをし、110エーカーの開拓農地の真中に製粉所と２階建ての煉瓦造りの家を建てました。その農場は現在のリバティー・パークとなり、２つの建造物ーブリガム・ヤングの製粉所とアイゼック・チェイス・ホームは、今なお現存しています。

1899年、ユタ州議会は全国で初めて州芸術部局を設立し、州の永続的な芸術コレクションのため、芸術作品購入の委任をしました。ユタ州芸術委員会、民族芸術プログラムは1976年に設立されました。その収集物にはナバホ民族の籠、ユート族やショーショーニ族によるビーズ細工、木彫り、手製のカーペット、馬の鞍、生皮製ロープ、馬のたてがみで織られたカウボーイ服装品、ポリネシアの工芸品、そして、日本の折り紙芸術などがあります。そして、新たな収集物が継続的に加わっています。

1987年に、チェイスホームは州民族芸術コレクションのための、本拠地となりました。それ以来、20万人以上もの訪問客が無料展覧会やコンサートを体験してきました。チェイスホームでは、ユタの伝統的な文化を裏付ける記録や写真の膨大な貯蔵物をも保管しています。

その類では全国で唯一の州立博物館であるユタ州チェイスホーム民族芸術博物館は、ユタの民族、原住民、保護地区や地方の伝統芸術家たちが、自分たちの製作した工芸品、音楽、踊りなどを地域住民、同郷のユタ住民、また世界中からの訪問客と分かち合う場所となっています。